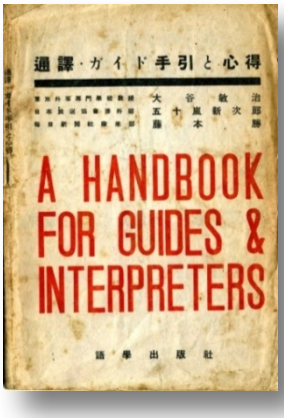
昭和 21 年 3 月の同時通訳

水野 的

一冊の本



私の手許に1947年（昭和22年）に刊行された大谷敏治・五十嵐新次郎・藤本勝(1947)『通譯・ガイド手引きと心得』（語學出版社）という本（というか小冊子）がある。裏が透けて見えるような質の悪い薄い紙が使われており、総ページ数はわずかに 54 ページ。本の三方はぼろぼろの状態で、ちょっと扱いを間違うと小さな切片となって零れ落ちる。あまり期待せずに入手したものだが、Herbert (1952) の *Handbook* に先立つこと 5 年、すでに通訳についての充実した説明のある貴重な資料であった。そしてそれ以上に驚かされたのは、この本には日本初の同時通訳についての証言が含まれていたことである。

日本における同時通訳のはじまり

一般に日本における同時通訳は 1950 年（昭和 25 年）の MRA (Moral Re-Armament)世界大会で西山千と相馬雪香によって行われたとされている（鳥飼 2007:190-193）。西山（1979）によると、この世界大会の会議の方法は次のようなものであった。まず檀上で英語以外の話者が話すと、それが英語に逐次通訳される。その次がちょっとわかりにくいのだが、西山は次のように述べている。

「私たちのように英語を日本語へ通訳する者は、ブースに入って、英語を聞いて日本語に通訳した。英語が話される間にドイツ語やフランス語などの多国語がさしはさまれるから、その言葉が話される合間に、それまで聞いた英語を日本語に通訳した。つまり英語の逐次通訳であった。

ところがそれを連日通訳しているうちに、少しずつ同時通訳らしき通訳もできるようになってきた。しかも、小グループで集まって打ち合わせをする場合は、話し合いを小さい声で相手のそばで同時通訳したこともあった。こうした経験から、徐々に同時通訳の技術を身につけるようになっていったのである」(西山 1979:123)。

前半部分は、ある言語で話されたスピーチを檀上でまず英語に逐次通訳し、次にドイツ語やフランス語でも逐次通訳が行われたということだろう。その間に西山らがブースで日本語に逐次通訳したものと思われる。

昭和 21 年 3 月の同時通訳

しかし、大谷らの本（の大谷敏治執筆部分）には、その 4 年前の 1946 年にすでに同時通訳が行われたという証言がある。同時通訳をしたのは著者本人で、大谷は当時 46 歳、東京外事専門学校（東京外国語学校[現東京外国語大学]が 1944 年から一時改称されたもの）の教授であった。大谷は次のように書いている。（旧字、旧かなは現代表記に改めた。）

「国際連盟以来、国際会議の多くなるにつれて、また用いられる公用語が英語とか仏蘭西語であるのに、通訳さるべき言葉は七十幾つの加盟国の言葉全部というのでは、通訳のためにおびただしい時間がかかることになる。そこで新しい通訳技術が発明利用されてきた。それは dictaphone の応用である（注 1）。日本でも昭和二十一年三月、米国教育視察団の来朝した時第何回かの総会の席で最初に使われた。そして筆者は、当日、当番の通訳者ではなかったのであるが、担当者の不参で、俄かにその仕事にあたって、大いにあわててそしてそこは心臓なんとかやってのけた—というとすさまじいが、まあお茶をにごした—その経験をお話ししよう。その後用いられたことも聞かないけれど、やがて、各国の代表列席の国際会議など、かならずやこの方法が日本でも採られようから。」(大谷他 1947:16)

この後使用した機器についての説明がある。

「話し手の前にマイク（…）がある。その送話線はそのまま聴衆の席の受話器(earphone)に繋がっている。通訳者は話し手の下に席を占め、その口許にもマイクがあり、送話線はやはり各聴衆の席の受話器に通じている。英語の判る聴衆はそのまま、判らぬものは通訳者との送話線の方へ switch を切りかえて受話器を耳にあてる。一二度 operator の試験、O.K.」

続いて実際の通訳のやりかたを説明する。

「話し手はやがて開口一番、どんどん話し出す。普通のように途中で切らない。それが標準英語であるところの、Middle-west の speedy な、intonation の平板な調子で、どんどん語りつづける。通訳者は一方にこれを耳で、じかに聴きながら、その意味を直ちにとって、これを日本語に直して、自分の前のマイクを通じて聴衆に—英語の判らぬ人々へ—送ってゆく。丁度話し手の語り終る時、通訳者もまた通訳し終る。時間はこのために少しも余計にかからない。また語り手の終るたびに日本語の通訳をきかねばならぬという、語り手、通訳者の、間の悪さもなくてすむ。」(大谷他 1947:17)

同時通訳という言葉は使われていないが、これは同時通訳である。ただし、ヘッドセットもなく、「通訳者は話し手の下に席を占め」とあるからブースもなかったことがわかる。「アメリカ教育使節団」は戦後日本の教育改革のため連合国総司令部が招聘したアメリカの教育者の使節団で、昭和 21 年 3 月（第一次）と昭和 25 年 8 月（第二次）に来日している。アメリカ側のメンバーは 27 名、これに協力するために作られた日本側の委員会メンバーは委員長として南原繁、ほか天野貞祐、小宮豊

隆など 29 名であった。「総会」というのはおそらく米日のメンバーの会合であり、同時通訳用機器はアメリカ側が持ち込んだのだろう。大谷の文章にはニュルンベルク裁判のことは出てこないが、東京裁判（極東国際軍事裁判）については満州皇帝溥儀のリレー通訳について触れている箇所がある。（なお大谷が同時通訳をしたとされる 1946 年 3 月の時点ではまだ東京裁判は始まっていない。）

米国教育使節団とその通訳

米国教育使節団の来日とその報告書は、戦後日本の教育改革において大変重要な意味を持っていた。鈴木栄一 (1983)『日本占領と教育改革』（勁草書房）、久保義三 (1984)『対日占領政策と戦後教育改革』（三省堂）、土持ゲーリー法一 (1991)『米国教育使節団第の研究』（玉川大学出版部）といった本格的な研究書も出ている。この中の久保義三の本の中に、アメリカ教育使節団の詳細な活動日程表がある。それによると大谷の言う「総会」は都合 9 回開かれていることがわかる。しかしいずれの本にも通訳についての記述はなく、同時通訳が何回目の総会に使われたのかは不明である。ただし、1 回目と 2 回目、9 回目だけは除外できる。1 回目は日本側代表はまだ参加していないし、2 回目については以下にある小川芳男の、自分がやったという証言がある。そして 9 回目は京都で行われているからである。従って大谷が「同時通訳」したという総会は 1946 年 3 月 9 日、12 日、13 日、14 日のいずれかということになる。（9 日は午前と午後に 2 回ずつ開かれている。）場所は華族会館であった。

米国教育使節団

教育使節団の通訳については、後に東京外国語大学の学長になる小川芳男の証言がある（小川 1979）。少し長くなるが引用しておく。（小川は大谷より 7 歳年少である。）

「二十一年の三月に、日本の教育を視察するため、アメリカからマサチューセッツ工科大学のストダード総長を委員長とした教育使節団 (American Education Mission) が来日した。この使節団は、各地を視察し、日本の教育に対する勧告をすることになっていた。このため全国から英語のできるものが集められ、通訳をさせられることとなり、私も引っぱりだされた。

初日に日米の代表団による総会があったが、会場には通訳が一人しか入れないという。だれか通訳してくれといわれたが、みんなしりごみしているうちに、とうとう私が安倍能成文部大臣の通訳をすることになってしまった。まったくの行きあたりばったり方式で、文部大臣に会ったのもそのときが初めてというありさまで、しどろもどろに訳してしまい、いま思い出しても冷や汗が出てくる。ともかく事前打ち合わせも原稿もないまま、私が心臓で引き受けたわけである。

帰途、東大の宗教学の岸本綾夫（ママ）（注 2）教授が、私が後ろから歩いているのに気づかず「今日の通訳はどうもまずかったね」と話されているのを聞いて、穴でもあれば入りたい気持ちだった。それ

でも翌日から気をとり直して、最後まで使節団の相手をして名誉回復に努めたものだ。その後、部会などで私の片腕として協力されたのが、現在、成城学園短期大学英文科長の中村（当時、河野）道子女史（注 3）だった。彼女の英語はすばらしい。」（小川 1979: 168）

安倍能成文部大臣の教育使節団への挨拶が行われたのは 3 月 8 日午前中の第一回総会である。約 30 分の挨拶で、通訳を含めて 1 時間であったという。安倍が日本語で原稿を書き、それを神谷美恵子（当時は前田美恵子）が徹夜で英訳、タイプしたのだが、翌朝安倍の乗った車が神谷の自宅に迎えに行った時にもまだできあがっておらず、会場に向かう車の中で発音の訂正をしている（安倍 2003; 神谷 1980）。したがって小川の通訳は英語から日本語への逐次通訳であったと思われる。しかし英語の原稿は安倍のものしかなく、小川は原稿なしでやらざるを得なかったということであろう（注 4）。神谷は前任の父前田多門文部大臣の時から、東大医学部精神医学教室の医局に籍を置きながら文部省で翻訳や通訳の仕事に従事していた。当時文部省には実用英語ができる役人が一人しかおらず、父から「国家の大事」と懇願されたためであるという。その頃については『遍歴』所収の「文部省日記」に詳しい。安倍能成も『戦後の自叙伝』に当日のことを書いている。しかし不思議なことに二人とも通訳については触れていないのである。

通訳ノート・訳し方・地位について

『通譯・ガイド手引きと心得』に戻ると、大谷の記述には他に簡単な通訳の歴史や今でいう通訳者の役割論も含まれ、通訳技術の面でも、スピーチの区切りのあり方、準備の方法、メモの取り方についての説明がある。メモについては「許さるる場合には、また、数字とか年月日とか、重要なる項が相次ぐ場合にはもちろん許可または諒解のもとに、メモをとることは差支えない」(p.16)といったようなごく短い記述であるが、最初期の通訳ノートに関する記述として歴史的意義がある。（なお通訳ノートについては、共著者の藤本勝の執筆部分に具体例がある。Dem 188 で「民主党は 188 議席」のような簡単なもので、あとは人名である。）また「聖徳太子ならぬ凡人は、耳に聴いて同時に口にいうは容易ではない。殊に言葉の構成の違う欧州語と日本語では— It is..... という間、その it が何であるか、あとにつづく that 以下を期待してまたねばならない。まして、that 以下をきいてさて前にもどって訳すようなやり方では到底追いついてゆけないことになる」(p.18)という、いわゆる「順送りの訳」を思わせる訳し方の示唆も含まれている。この点では大谷の記述は同じ年に出た岡崎熊雄『通訳概論（通訳者の必携）』とは大きな違いがある。岡崎が想定していたのはもっぱらアドホックな通訳であり、会議通訳ではなかったからである。大谷は通訳の部の最後に次のように書く。

「通訳はかくして正に万人の、永遠の心を捉え伝えるものの冷静な学問の上に立つ熱烈な人生の芸術である。通訳を志す人々よ、その使命の崇高さに畏みつつしんで精進しようではないか。通訳を使う人、依頼する人よ、通訳者のいや通訳者はどうでもよい—言葉の霊妙不可思議な力を礼拝し、その聖なる使徒を、軽軽に通訳でもなどとよびたまうなかれ。それは実に人の魂の語り手、伝え手、神の使いたるを悟り、その社会的地位をそれにふさわしく、与えたまえ。」（大谷他 1947:18)

なお、この小冊子の共著者である五十嵐新次郎は当時NHK渉外部で、後に早稲田大学教授となり東後勝明、田辺洋二、松阪ヒロシらを教えた。羽織袴姿でテレビ出演し、「ヒゲの五十嵐」と呼ばれてちょっと有名になった。藤本勝は毎日新聞社欧米部所属で、その後「英文毎日」の編集長を務めた。

大谷敏治:その人物像

それでは大谷敏治とはどのような人物だったのか。大谷のおおまかな経歴は判明したが(注 5 年譜参照)、どのようにして通訳技術を身につけたのかはわからない。おそらく戦前の海外視察・研究の経験が大きいのだろう。1936 年(昭和 11 年)9 月 5 日～8 日の大阪朝日新聞に「日豪交渉の立役者ガレット氏と語る」という大谷のオーストラリア訪問報告記事が載っている。(この記事はメルボルンから送ったものでガレット氏とは 7 月に会っている。)ガレット氏とは当時のオーストラリア連邦政府の通商大臣 Sir Henry Gullet のことである。その頃日本とオーストラリアの間には日本からの繊維製品輸出を巡って通商問題が起きていた。(この年の 1 月にオーストラリアは、日本に対し綿製品とレーヨン製品の輸出量を前年の半分にしなければ高額の関税を課すと通告していた。オーストラリアはイギリスからの圧力を受けて苦慮していたようだ。)大谷はそのガレット大臣の自宅にも招かれ通商問題についてかなり専門的な話をしているのである。当時三十代半ばであったろうが、相当な英語力があったと思われる。オーストラリアには 2 カ月近く滞在しているが、この旅については大谷の著書『南方共榮圏』(1941)で詳しく知ることができる。出発は 1936 年の 5 月で約半年に及ぶ旅であり、オーストラリアまでは何と帆船である。文部省航海練習船海王丸(注 6)への特別便乗制度に応募したもので、南洋諸島を巡ったあとオーストラリアに到着し、オーストラリア国内は陸路と旅客機を使ったが、帰路の船のあてはなく、幸いにも中国船籍の貨物船に便乗してフィリピン、台湾経由で帰国している。小さな漁船に乗ってアラフラ海の日本人労働者による真珠取りの現場を見るなど、行動力に富み、好奇心旺盛とも言えるが、無鉄砲とも言える。本人も「はしがき」で述べているように「無計画」な旅であったようだ。とはいえ、オーストラリアでは精力的に多数の大学人や政治家、産業人、新聞人と会っている。また「各州の教育局の斡旋で、下は幼稚園から上は専門学校まで廻りあるき、且つ各種の教材や教科書を貰い集め」ている。『南方共榮圏』にはブリスベンの小学校での、「此の小父さんは、帆前船で日本から来られた、日本はどういう國か知つてゐる者は？」「日本から私達は玩具を買います」という会話も紹介されている。この教育制度への関心と知識が、後に米教育使節団の通訳をする機縁とも土台ともなったのだろう。

大阪朝日新聞より

大谷は 1939 年に東京外国語学校(1949 年に東京外国語大学)の教授となり、経済英語、商業英語、貿易論などを教えたとされる(東京外国語大学史編纂委員会 1999)。いわゆる「共通講座」担当である(東京外国語大学では専修科目担当教官と一般教育(一般教養)担当教官は、カリキュラムと学内行政において完全に平等であった。大谷の後、有名な共通講座担当教員としては伊

東光晴や中島嶺夫などがいた)。小川(1979)は、国際関係コースが発足しても外国の事情に詳しく、語学も強い教員がなかなか見つからず、「商業英語の大谷敏治氏が主任となって地域研究が徐々に充実した」と言う。著書を見ると戦後はほとんど実務商業英語と一般英語教育に専念したようだ(注 7)。しかし、戦中の著書で分るように実務的な経済学者の面もある。1950 年代末にはイギリスに留学(1960 年帰国)している(大谷 1971)。大谷は 1962 年に東京外国語大学を退官するが、大谷の在任中には浅野輔や福井治弘、小松達也が学生として在籍していた。退官後は、1980 年ごろまで、論文やエッセイを書き続けた。

大谷の人となりについてはあまりわからない。英語教育については1949年に財団法人日本英語教育協会から出た『通信教育カレッジ シニアスタディガイド I』という、高校生(新制)のための通信教育講座を執筆しており、どんな教え方をしていたのかある程度窺い知ることができるが、内容的にはあまり新味はない。「日本の現在では、その英文の意味を日本語で言い表すことの必要な場合があります。通訳とか、翻訳の仕事がそれです」という記述があるぐらいである。

大谷と同じ小樽高等商業学校出身である伊藤整は 3 歳年下であり、大谷は伊藤の入学とすれ違いに卒業しているから接点はなかった。しかし後年、手紙や同窓会関連の集りなどを通じて知り合うようになり、小樽商大同窓会誌『緑丘』の伊藤整追悼特集号 (1971)には「静なる男－秘められた闘志－」という一文を寄せている。これを読むと大谷が伊藤整の業績によく通じていただけでなく文学全般についてかなりの素養があったことがうかがえる。昭和初期にジョイスの「ユリシーズ」の翻訳が出たのを機に原本も読んでいる(彼が読んだ翻訳は森田草平・龍口直太郎・安藤一郎らのもので、伊藤整らの翻訳ではなかった)。1976 年にはノーベル賞作家パトリック・ホワイトの生活と作品をオーストラリア社会の形成と関連づけて論じている(大谷 1976)。

大谷はまた、教育とキリスト教伝道に努めた西村久蔵(注 8)の生涯を描く三浦綾子の伝記小説『愛の鬼才―西村久蔵の歩んだ道』(1983 年刊)の中に、西村の親友として登場する。同書には「大谷敏治は久蔵より三歳年下であったが、はなはだ優秀な学生で、卒業後、母校の小樽高商に勤め、同校教授を経て、東京外語学校の教授となった。大谷もまたキリスト教信仰をもち、久蔵の没するまで、(…)終生変わらぬ友情をもって久蔵と交わった」とある。久蔵が病躯を押して上京するのを、西村夫人に付き添って上野駅に迎える様子も出てくる。

「日本で初めて同時通訳をした男」は、60 歳で定年退職した後比較的長命を保ち、1989 年、88 歳で没した。死因は肺炎とされる。

……

文献

安倍能成 (2003)『戦後の自叙伝(人間の記録 149)』(日本図書センター)

江利川春雄(執筆)木名瀬信也　中村道子(証言)(2002)「文部省著作 *Let's Learn English* の編集とその周辺」『HiSET Journal』17(0), 95-108.

大谷敏治 (1941)『南方共榮圏―観察と探訪』(三省堂)

大谷敏治・五十嵐新次郎・藤本勝 (1947)『通譯・ガイド手引きと心得』(語學出版社)
大谷敏治 (1949)『通信教育カレッジ シニアスタディガイド I』(日本英語教育協会)非売品
大谷敏治 (1971)「静なる男－秘められた闘志－」『緑丘』(小樽商大同窓会誌)81・82 合併号(伊藤整追悼特集号)
大谷敏治 (1976)「オーストラリア社会の形成とその文学－パトリック・ホワイトを中心に－」『オーストラリア研究紀要』2.(追手門学院大学オーストラリア研究所)
「日豪交渉の立役者ガレット氏と語る」「大阪朝日新聞」1936 年 9 月 5 日 www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/use/
岡崎熊雄 (1947)『通訳概論(通訳者の必携)』(ライトハウス出版部)
小川芳男 (1979)『私はこうして英語を学んだ』(TBS ブリタニカ)
神谷美恵子 (1980)『遍歴(著作集 9)』(みすず書房)
西山千 (1979)『通訳術と私』(プレジデント社)
東京外国語大学史編纂委員会 (1999)『東京外国語大学史』(東京外国語大学)
鳥飼玖美子 (2007)『通訳者と戦後日本外交』(みすず書房)
Herbert, Jean (1952). *The Interpreter's Handbook - How to Become a Conference Interpreter,* Librairie de l'Université, Geneva, Switzerland

【注】

(注 1)dictaphone は文字おこし用にテープレコーダーとヘッドフォンを組み合わせたものであるから、大谷は勘違いしているようだ。

(注 2)岸本綾夫は軍人であり、岸本英夫の誤記と思われる。

(注 3)江利川他 (2002) によると、中村道子は 11 歳までアメリカで生活し、東京女子大学を卒業したバイリンガルであった。占領下日本で文部大臣の通訳をつとめ、「米教育使節団の通訳時には小川芳男と組んで教科書関係の部会に入った」(p.102)という証言があり、小川の記述と一致する。

(注 4) カーボン紙を挟んでタイプすれば写しはとれるが、そんな余裕もなかったのかもしれない。日本語の原稿も持参しなかったのだろう。なお安倍の挨拶の冒頭部分は次のようなものであった。

「淑女並びに諸君　相互扶助の好意と熱情とに燃えて、遥々太平洋の波濤を越えて到着せられた所の、貴国教育界の最高水準を代表せられる諸権威に対して、ここに歓迎の辞を述べますことは、文部大臣たる私の最も光栄とし歓喜とするところであります。この稀有な幸福な機会を利用して、外交的、社交的儀礼の詞ではなく、率直にして飾りなき心からの詞を交換せんとする私の願いは、又諸君の諒とせられるところだと信じます。」

(注 5) 略年譜

明治 34 年 (1901) 7 月 1 日生れ　出身地は札幌
大正 10 年 (1921) 小樽高等商業学校卒(22 期生)
昭和 2 年 (1927) 小樽高等商業学校講師
昭和 4 年 (1929) 小樽高等商業学校助教授(資料により年度が異なる)
昭和 8 年 (1933) 小樽高等商業学校教授

昭和 14 年 (1939) 8 月、東京外国語学校教授
昭和 16、17 年 (1941, 1942) 日本学術振興会より精神科学研究奨励賞を受ける
昭和 24 年 (1949)　大学昇格時には一時助教授、翌年教授となる
昭和 37 年 (1962)　東京外国語大学退官
平成 1 年 (1989)　10 月 17 日没（88 歳）

（注 6）海王丸は航海訓練所（現在は海技教育機構）が保有する航海練習船（練習帆船）。1930 年（昭和 5 年）進水。1994 年に富山県海王丸パークでの恒久係留が決定した。現在は二代目海王丸が運用されている。

『南方共榮圏』口絵より

（注 7）著書の一部（本文中に挙げた文献は除外してある）
『マライの経済資源』東亜政経社 1943 (南方経済資源総攬 第 6 巻)
『マライ経済の諸問題』文化研究社 1943
『インドネシア民族史』今日の問題社 1943 (東洋民族史叢書 第 2 巻)
『南方経済資源総覧 第 6 巻』東亜政経社（編） 東亜政経社 1943
『日本国憲法 = The Constitution of Japan : 英和対照』アポロ社 1947
『最新英文商業通信』（ロバート・L・シャーター著 大谷敏治訳） 時事通信社 1950
『New English in business: teacher's manual 』(G.R. Storry, 大谷敏治) 実教出版 1954
『New English in business』 Business English 1 実教出版 1955
『商業英語』(現代経済知識全集 第 50) 中央経済社 1955
『New English in Business: Teacher's Manual 』実教出版 1959
『Living in English 1-3』(by Toshiharu Ohtani, Samuel J. Lang) 教育図書 1962, 1963, 1965
『Living in English: 英語 A 1-3』（大谷敏治他著） 教育図書 1963, 1964, 1965

『アフリカの工業化と我国の企業進出』(世界経済問題研究叢書 第 4 輯)近畿大学世界経済研究所 1966

＊この他論文は小樽高等商業学校時代を含め多数ある。

(注 8)西村久蔵(1898 – 1953):小樽生れ。札幌商業学校の教師、道議会議員も勤める。日本キリスト教会北 1 条教会長老で江別のキリスト村の開拓者でもある。1929 年、貧しい子供たちにもシュークリームを食べさせたいと洋菓子店ニシムラを創業(現在はニシムラファミリーがその理念を受け継ぐ)。聴覚障害者の店リリーへの商品提供でも知られる。困っている人には衣食住を惜しみなく与え、自分はすり切れた服を着てボロボロの靴を履いていたという。

.....

【著者紹介】水野 的 (MIZUNO Akira) 日本通訳翻訳学会会長。